

都倫研 第1回読書会 レポーターより

課題図書 上野修「スピノザの世界」講談社現代新書

都立 立川高校 菅野功治

「倫理」の授業で西洋哲学を扱う際に、正直私が最も自信がないのがこのスピノザである。6年前に上野修氏の「スピノザの世界」を買ったが、全く意味が分からず読み切ることが出来ず、そのまま放置されていた。3ヶ月前より、江川隆男氏や国分功一郎氏の講義を聴き、少しずつ何を問題視しているのかということが、分かってきたような気がする。

いや、本当のところは相変わらず、スピノザは分からない。分かってきたのは、無神論者であると思っていた自分が、神を人格を持った世界の制作者であると理解し、人間精神もその類推で理解していたのではないかという事実だ。(そのようなあり方の神は信じていないのに、人間の方はそのように信じていることになる)スピノザの世界理解が特殊だとするならば、このような私の世界理解は普遍的なのか。

言い方を変えれば、私は人間精神を「実体」として捉えてきたということであるが、私はこの「実体」という言葉の明確な定義付けもせず、アリストテレスもストア派もスコラ哲学もデカルトも生徒に教えてしまっていた。本書の中心概念となる「実体」「属性」「様態」「自由意志」の理解には困難が伴うが、これらは全てデカルト哲学の用語でもあるのだ。

以上の様な問題意識から本書を読んでいます、その際に無限後退の末のねつ造である「イデア」「理性」「絶対精神」といった「同一性」を根本に据え「普遍性」を求める従来の哲学に対し、「差異」や「特異性」を根本に据え「発生」を問いただし、「問い」を發することを目指すドゥルーズを導き手としていくことになると思います。

1章、2章は読み飛ばして、3章「神あるいは自然」、4章「人間」、5章「倫理」を中心にじっくりと読んできて頂いて、ざっくばらんに思うところを議論できればと思います。

【参考文献】

スピノザ『エチカ（上・下）』岩波文庫

ドゥルーズ『スピノザの実践哲学』平凡社

ドゥルーズ『スピノザと表現の問題』法政大学出版会